

『駒込ピペット』

✱

駒込ピペットが届いた。

僕は両手をあげて大きく喜んだ。

宅配に来たお兄さんとハイタッチもした。

彼は、『こんなの初めて』と照れていた。僕は彼に、『それならあがつていく？』と誘ってみたけど、彼は、『いや、仕事なんや』と何の捻りもない回答をしてくるものだから、彼に対する興味が一気に薄れて、『あらそう』と言ってゆっくり扉を閉めた。

それから三十分くらい経った頃、不意に、『さっきの自分は強情だったなあ』という想いが浮かんできて寂しさが湧きあがつてきた

仕事と誠実に向き合っている彼に酷いことをしてしまった。

扉を一方的に閉められた後の彼の気持ちを考えると胸が抉られた。

今になってようやく正常な判断力が戻っていた。けど三十分前は、駒込ピペットが届いた高揚感と宅配便のお兄さんがハイタッチをしてくれた爽快感で我を見失っていたのだろう。

あの時、上質な回答が返って来るものだと思いついた僕は、見返りを求めてしまっていたのか、と過去の出来事を振り返ることで自分の心情を確かめていた。

宅配便のお兄さんに、『ごめんね』って言いたいけど言えない。

なぜなら、彼と出会う手段がないからだ。

僕は、鼻をほじった。

先週の木曜日に注文してから昂る気持ちが続いてつづけた。九百九十七円アンド送料無料。手元にあるスマートフォンの画面を人差しでひょいひょいと扱いながらものの五分ほどで注文完了画面までたどり着いた。

「世の中、便利になったなあ」

注文完了までの五分間で二十三回も呟いていた。

今の時代、わざわざ本屋へ、ビデオショップへ、お目当ての品物を見定めに、ご飯を食べに出向かなくても、家でスマートフォンを操作すれば、何でも簡単に届けて貰える。

スマートフォン画面上には必要な情報だけがやってきてくれて、『何とも有り難いシステムだ！』なんて思うことなく指先をタッチしている。

それこそむかし、アニメのヨッシャーマンをテレビで見ていた時に印象に残った『ポチポチポチとなあ』という言葉一つで何でもできるようになってしまったのだ。

トロンボーン一味のツブヤッキーがヨッシャーマンを倒すために必死で発案して設計したからこそあの『ポチポチポチとなあ』という言葉に重みがあるのに、誰かに発案して貰って誰かに設計して貰った物にブウブウ文句を垂れながらボタンを押すだけ。

『お前ら、ツブヤッキーの気持ち考えたことあるのかよ！』と誰かに言われても何も言い返せない世の中になってしまった。

こんなに偉そうに言っている僕なのだが、スマートフォンで駒込ピペットの注文確定ボタンを押す時に、『ポチポチポチとなあ』と呟いていた自分を今、思い出したものだから、『それはよろしくない』と自分に言い聞かせてみた。

すると、言い聞かされた脳みそは、『この際だから、わざわざ出向いてみれば？』と言い返してきた。

僕は、『その手があったか！』とすぐさま床に投げ捨てられていたスマートフォンを拾い、検索欄に『駒込ピペット 由来』と打ち込んだ。

田園都市線に乗り込み、渋谷駅で降りる。

山手線に乗り換えて駒込駅へと向かった。

田園都市線に乗るとき、『今日はどの車両に乗ろうかな？』と一瞬悩みそうになったけど、いつも通り『六号車』に乗っていた。

渋谷駅と中央林間駅を結ぶ線を東急田園都市線と呼ぶ。

僕はその沿線上の駒沢大学駅にゆかりがある。だから東急田園都市線にはお世話になりっぱなしだ。駒沢大学駅から渋谷方面へ乗り込むことが多い。渋谷を越えると、東京メトロ半蔵門線に名が変わる。

同じ電車の同じ席に座っているだけなのにある地点を境に、『今、東急田園都市線に乗っている』から、『今、東京メトロ半蔵門線に乗っている』に言い方を変えなきゃならないからいささかややこしい。

もう一つ付け加えるなら、東京メトロ半蔵門線は渋谷駅と押上駅を結ぶ路線名称であり、押上を越えると東武スカイツリーラインを経由して、東武伊勢崎線や東武日光線に線名を変えるものだから、これまたややこしい。

だけど、減多に押上より先に行くことがないから、その辺の心情は割愛させていただきたい。

六号車に乗り込んだ僕は『翼をください』を唄っていた。

今日は丁度、『この大空に』のサビの部分から入れるタイミングで乗り込んだから気分も上がった。

乗客の皆もタイミングの良さを掴み取ったみたいだ。
明らかに、全体の空気が華やかになった。

田園都市線は車両によって歌う歌が変わってくる。

一号車から、旅立ちの日に、時の旅人、大地讃頌、心の瞳、あの素晴らしい愛をもう一度、翼をください、気球に乗ってどこまでも、グリーングリーン、BELIEVE。そして、十号車はハレルヤ。

そう。

もう分かっている人間も多いと思うけど、合唱コンクールに採用されやすい曲で構成されているのが田園都市線なのだ。

通勤ラッシュと帰宅ラッシュの混雑のなかで唄う合唱曲はロマンだ。

もう一つ付け加えるのなら、女性専用車両に成り代わる十号車。
その時間帯に唄われる女性だけのハレルヤは芸術品だ。

もちろん、男性は乗り込めないのでわざわざ九号車に乗り込んで、『たとえば君が傷ついてくじけそうになった時は』とBELIEVEを唄いながら十号車から聞こえてくる芸術的なハレルヤに耳を傾ける者も少なくはない。

世界中の希望のせてこの地球はまわってる。

いつも通り六号車に乗り込んで『翼をください』を唄った僕は、渋谷で降りた。

三軒茶屋と池尻大橋の間で隣の人と目が合い軽くグルーヴが生まれた時のあの清々しさは何にも変えられない。

山手線に乗り換える。

山手線は全車両一律で同じ曲を唄う。

基本的に年間契約みたく、今年は中島みゆきイヤーだった。

普段はあまり乗り込むことがないが、先月品川駅での用事を済ませるために乗り込むと、皆が、『地上の星』を唄っていた。

風の中のすばる。砂の中の銀河。

モニターには歌詞が表示されているから、知らない人でも気軽に口ずさむことができる。

失礼な話になるのだが、僕は当時、中島みゆきさんの曲をほとんど知らなかった。だから地上の星も初めはモニターの歌詞を見つめながら手探りで唄うに留まった。

草原のペガサス。街角のヴィーナス。

先月の記憶を思い浮かべながら僕は、山手線に乗り込んだ。

今月は『糸』だった。

なぜめぐり逢うのかを私たちはなにも知らない。
いつめぐり逢うのかを私たちはいつも知らない。

この前、品川駅へ向かうために山手線を利用してから僕は、中島みゆきさんにドハマリした。

あの日、家に帰ってからすぐに最寄りのカラオケボックス『バックエコー』へ向かい見よう見まねで唄いに唄った。

電子目次本。

略して、『デンモク』の履歴は中島みゆきで埋め尽くされていた。

山手線と年間契約を結んだアーティストはカラオケの履歴欄を独占する。

いつからか日本のあるあるに加えられたこの事象。

街角インタビューで、『日本といえど？』と訊ねると三人に一人はこの答えを言うに違いない。

影響力って凄いなあ。

僕も影響を受けた一人だ。

マイブームは中島みゆきさん。

僕はモニターの歌詞を見ることなく、『糸』を気持ちよく唄った。

周りの乗客もそうだが、ぶらさがるつり革たちも気持ちよさそうに左右に揺れている。彼らは電車が走る動力で揺れているのではない。

中島みゆきさんの唄が気持ちよくて揺れているのだ。

縦の糸はあなた。横の糸はわたし。

それぞれ好意を抱いた人間に向けて手を差し伸べる。

電車に乗り込むときから差し伸べる相手を決めていたのかもしれない。

僕は思った。

今月の山手線は、誰かと巡り合う可能性が高くなるかもしれないぞ！ と。その証拠に手を差し伸べ合っていた乗客たちがそこかしこで連絡先を交換しているではないか。

僕は、心の中で口ずさんだ。

回る、回るよ、時代は回る、と。

僕自身も、先ほど手を差し伸べた人間にアプローチしてみようと試みた。

「良かったら連絡先交換しませんか？」

彼女は、僕をつま先から頭上までを一通りなぞってから、『いいえ、結構です』と言った。

誘いを断られたショックなのか、僕は何も言葉を発することができずに俯くしかできなかった。

そんな僕に気を遣った彼女は、『決してあなたのせいじゃないのよ』と弁解しながらも『君が涙のときには僕はボプラの枝になる』と言い残して隣の車両に移っていく。

彼女の背中を見つめながら僕はおもう。なぜ彼女は、『空と君のあいだに』の冒頭部分を僕の目を見ながら唄ったのだろうか？

遠ざかる彼女を見つめたまま、『空と君とのあいだには今日も冷たい雨が降る。君が笑ってくれるなら僕は悪にでもなる』と小さく呟いた。

これもこれで素敵な出会いだったのかもしれない。

出会って結ばれるだけが運命じゃない。

ふと車両を見回すと人々の冷たい視線が僕を捉えていた。

連絡先を教えて貰えなかった惨めな人間だと思われているのだろうか？

せっかく都合よく納得させたのに、『僕の気持ちも考えずに掘り返すなよ』と内側から湧き出た沸々とした感情を抑えることなく、僕はそれらを言葉にのせた。

「同情するなら金をくれ」

駒込駅の改札を出た瞬間、髪の毛が膝くらいまで伸びた男性を見つけた。

僕は彼に興味を持ったから二十分くらいはれないように観察していた。

彼は二十分間で一度だけ空を見上げたが、それ以外はずっと宙を見つめていた。

僕は閃いた。

閃いた時には身体を動かしていた。

『お待たせえ。ごめん、待った？』と、さも待ち合わせに遅れてしまった人間を装って髪の毛膝くらいに近づいて声を掛けたのだ。

すると、『全然、俺も今来たところだから』と髪の毛が素直に返してくれるものだから僕はそのまま、『じゃあ行こうぜ』と行く当てもない方向を指さして歩き出すしかなかった。

ここで、『何ですかそのノリ。騙されませんよ、私は』なんて言って貰って、僕も僕で、『つい出来ごころで』なんて頭を掻きながら二人で少しばかり談笑してキリの良いところで、『それでは、さようなら』とでも言って、お別れするまでを想定していたのだが、髪の毛膝くらいは歩き出した僕の右隣に並び、『いつもの店で良い?』なんて当たり前のように言ってくるもんだから、もしかして僕たち週二回くらいで会ってる仲だっけ?なんて尋ねてみたくなったけど、そこは大人としてぐっと我慢してそのうえで覚悟を決めて、

『いつものところでいいよ』

と大学時代からの友人で卒業してからも週二回くらいで会っている間柄が交わしそうなトーンで言いのけた。

髪の毛膝くらいはくしゃつとした笑顔を見せて、『いつもありがとな』と僕に言った。

「二人共、いつもので」

と髪の毛膝くらいが言った。

駒込駅から徒歩九十秒。

南口からちょこつと路地を歩いた先にある喫茶店。

僕たちは入り口から入った。店主が髪の毛膝くらいの顔を見て、『やあ』と言う。膝くらいも同じように『やあ』と言う。僕は軽く微笑みを見せて会釈をする。席に座る前に膝くらいが先ほどの言葉を言った。

「二人共、いつもので」

いつものが何なのか分からないまま待っている僕は、考えた。

何が出てくるのだろうか?

それ以前になぜ自分が髪の毛膝くらいまである人間と今、行ったこともない喫茶店でのんびりと過ごしているのか疑問に思った。

僕の考える姿を見て膝くらいは、『相変わらずだなあ』と言って煙草を吸った。

『相変わらずだなあ』と言われても、初対面のはずだから何に對しての相変わらずなのか理解しがたいが、その時、右ポケットに忍ばせていた駒込ピペットの存在を思い出し

て、もしかしたらこいつの力なのか？ と、疑いをかけずにはいられなかった。

「お待ちせしましたあ。ナポリタンです」

店主が親しみのある声で膝くらいの前にナポリタンを置いた。そして、クリームソーダを横に添える。

膝くらいは、『いつも有り難うございます』と謙虚な姿勢を見せていた。

「こちらこそいつも元気を貰ってるよ」

と店主の心も温まっているみたいだった。

店主の持つお盆には珈琲カップが一つ。

さあ、次は僕の番だ！ と思った時には、

『はい。アメリカンコーヒー』

と目の前のテーブルに珈琲カップが置かれていた。

そして店主は店の奥にある厨房へ戻っていった。

さあ、メインディッシュは何だ！

と鼻息が荒くなるのを抑えながらも拳に力が入る。

その時、満を持して奥の厨房から店主が姿を現した。

オムライスか？

カレーライスか？

パスタか？

ドリアか？

憶測が飛び交う脳みそに待ったをかけるように店主が膝くらいに『ちょっと出掛けてくるね。もし誰かが来たらちょっと待っててもらって』と言って花柄のエプロンを脱いで出口から出て行った。

カランコロン。

と聞こえるはずもないのに昔ながらの音が耳の中に響いた。

しばらくして、『僕ってこれだけだったけ?』と美味しそうにナポリタンを食べる膝ぐらいに訊ねると、彼はくしゃつとした笑顔を見せて『相変わらずだなあ』と目を細めた。

膝ぐらのクリームソーダがなかなか減らない。

もしかしたら一口も飲んでいないんじゃないか?

彼がナポリタンを食べる間にアメリカンコーヒーを飲み干してしまった。

少し経って戻ってきた店主が二杯目のアメリカンコーヒーを淹れてくれたが、僕は内心『そっちなじゃないんだよなあ』とお腹がグーグー鳴るのをわざと聞かせてやろうと意気込んでみたものの何の効果も発揮しないことを察して潔く諦めた。

僕と膝ぐらいはどういう関係なのだろう、と考えていると右ポケットに何かが入っていることを思い出した。

『そうだ。駒込ビペットだ』

こいつの由来を調べてそれを確かめるために駒込駅に来たんじゃないか。

本来の目的を思い出した僕は、前哨戦として右ポケットで待機する駒込ビペットを何かに使えないものかと考えた。

普段から考えることが好きな僕の脳みそは慣れているのか、すぐに閃きを与えてくれた。

『膝ぐらのクリームソーダをその駒込ビペットで飲ませてやればいいんじゃないか?』

バニラアイスがメロンソーダに溶け込んでしまうくらい時間が経ったクリームソーダを見つめていた。

やってみたいという好奇心と怒られたらどうしようという危機感が心の中で真剣勝負していた。

別に初対面の相手なんだから好き勝手やっちゃえよ。でも、激怒されて煉瓦で後頭部を殴りつけられたらどうしよう? どこから煉瓦持ってくるんだよ。ポケットに入っているかもしれない。そんなことあるわけないだろ。分からないよ? そこまでいうなら確かめてみるよ。うん、分かった!

僕は、膝くらいのポケットに目を向けた。

彼の左ポケットが煉瓦くらいの大きさに膨らんでいた。まさか、と思った時にはすでに僕の身体から好奇心が溢れ出して、右手を右ポケットへ向かわせていた。

『ここまで来たんだ。もうどうなっても構わない』と勢いよく駒込ピペットを取り出し、膝くらいのクリームソーダに向かわせる。

吸い込め、駒込ピペット！

半ばもうどうにでもなれ精神でクリームソーダに駒込ピペットの先端部分を忍ばせる。それから赤いゴムの部分を押さえて空気を吐き出してから押さえた指をパツと離す。

駒込ピペットに、溶けたクリームソーダが入り込んでいく。

僕はここぞとばかりに『はい、口をあけてえ』と赤ん坊に離乳食を食べてもらうくらいの接し方で膝くらいの言葉を投げかけた。

膝くらいは一瞬僕の目を見たが、すぐに『うん』と言って口をあけた。

開く口の中へ駒込ピペットの先端を向かわせる。

そして膝くらいの口の中へ注げるくらいまでたどり着いた時、赤いゴムの部分をブッシュする。

クリームソーダが、膝くらいの喉を通っていく。余韻に浸る膝くらい。

彼が一瞬、左ポケットに膨らむ物体を撫でる。

まだ正体は明かしていないが、あの大きさ、あの硬さ、まさに煉瓦だ。

僕はそう思った。瞬間、膝くらいがこちらを見て口を開いた。

「いつもはもっと早く飲ましてくれるのに今日は全然飲ませてくれないから偽者かと思つたよ」

偽者だけど？ と内心思いながらも『ごめんごめん』と言う。

「もう少し遅かったら痺れを切らしてこの煉瓦で頭をかち割るところだった」と左ポケットを撫でながら優しく微笑む膝くらい。

僕の身体は知らない間にブルブルと震えだしていたが、その時膝くらいが、『あーん』と口を開いたものだから僕は、無理やり口角をあげてクリームソーダを飲ましてやった。

何度も何度も口を開く膝くらいに、何度も何度も飲ませてやった。

それを温かく見守る店主の腰元には花柄のエプロンが巻かれている。

最後まで飲み干した膝くらいが僕を見て、『相変わらずだなあ』と優しく微笑みかけてくれたことを、僕は一生忘れないだろう。